研究ノート　ニダバ (*Nidaba*) 43(2014), 119-122

土井忠生先生の「キリシタン語学」講義

古　浦　敏　生

§1　はじめに

土井忠生（どい・ただお）先生は、明治33年3月生まれ、広島県出身、京都帝国大学卒業、広島文理科大学教授、広島大学文学部教授を経て、昭和40年広島女子大学（現、県立広島大学）初代学長。室町時代語研究の第一人者。とりわけポルトガル人宣教師がキリスト教布教のために作成した『日本語・ポルトガル語対訳辞書（日葡辞書)』や『日本語文法書（ロドリゲス日本大文典)』などを資料として、外国人の目から見た日本語の研究（通称、キリシタン語学）を推進された。『吉利支丹語学の研究』、『吉利支丹文献考』、『ロドリゲス日本大文典』、『邦訳日葡辞書』などのご著作がある。国語学者でありながら、外国語（英独仏語のほか、ポルトガル語、スペイン語、ラテン語など）にも明るい稀有なお方であった。平成7年3月、94歳でご逝去。

筆者は、広島大学大学院文学研究科修士課程在学中（昭和36年度前期）に、土井先生の「キリシタンの日本語研究」という題目のご講義を受講した（注 1)。先日、身辺整理をしていたら、院生時代の薄汚れた大学ノートが出てきた。これには、先生から課せられ返却された筆者作成のレポート（テーマの正確な文言は忘れたが「授業内容を（400字詰め原稿用紙）10枚程度に、また、授業中に折に触れて話した研究者の心構え・学問に立ち向かう姿勢を5枚程度にまとめなさい」）が挿入されていた。そして、レポート末尾には先生ご自筆の批評が書き加えられていた。

§2　ご講義の内容

まず「キリシタンの日本語研究」に関わる原典資料・研究文献を数多く提示された後、日本におけるキリスト教布教の歴史を詳細に述べられた。そのごく一部を紹介しよう。

“Francisco Xavier は、人種としてはバスク人である。彼が最初に日本に来たのは、彼を導いた Yajirŏ 弥次郎（別名 Anjirŏ）が居たからである。彼が初めて弥次郎に会ったのは1547年であった。そして、弥次郎をゴアの学校に就学させた。

Xavier は1549年8月15日に日本に来て、まず日本語の文字に興味を持った。彼の同行者は、伴天連の Cosme de Torres と伊留満の João Fernandez であった。

鹿児島で布教の許可が得られたのは島津貴久のおかげであった。Xavier は、最初に支配

者の了解を得てのち末端に広めようと考えて、京都に向かった。けれども、当時の天皇、後奈良院には実権が無かったし、また、将軍、足利義輝も頼りにならなかったので、山口に帰って大内義隆を頼った。Xavier は 11 月に手紙を書き、その中で日本語の難しさを述べている。弥次郎は日本語の先生ではあったが、教養がなかったので、十分には役に立たなかった。

Xavier は、漢字に支那読みと日本読みの二通りがあって、どちらを使っても意味が通ずることを不思議に思った。大内氏が支那を尊敬していたことも手伝って、自分は日本よりも先に支那に行って布教すべきだと思い、支那に行き、そこで病死した（注 2)。"

"Luis Frois は、日本語が分からなかったので、懺悔を聴く聴罪師の役が果たせなかった。そこで、伊留満の Fernandez に日本語の文法書と辞書を作らせた。Frois は 500 通近い手紙を書き残しているのであるが、それらの手紙から Fernandez の作った文法書の内容や、また、辞書が葡和と和葡の 2 冊であったことなどが分かる。Frois は「日本語は語彙が豊富な上に、礼儀作法上のことが絡んでいて、むつかしい（注 3)」と言っている。"

§3　学問論に関するレポート（筆者作成）の内容

土井先生がご講義の中で触れられた学問論に関して、筆者は、レポートの中で以下の項目を抜き出している。箇条書きにして提示しよう（注 4)。

(1) まず、どこにどういう文献があるのか？これを調べることが大切である。たとえば、キリシタン関係ならば、上智大学・天理大学の図書館に存在することを知らねばならない。

(2) 文献・資料を書写するときには、頭が先走ってはいけない。つまり、自分で読んで、自分の思うままに書写してはいけない。常に客観的であらねばならない。

(3) 言うまでもないことであるが、オリジナルな原典に当たらねばならない。写本には写し間違いがあるので、信用しないほうがよい。(尤も、写真版なら問題ない)。

(4) 初版と再版が存在するときには、両者を比較して、一字一句間違いのないことを確かめる必要がある。学問では、これくらいの注意力が要求される。

(5) 書物を読むときの態度であるが、書物を大切にして、尊敬すべきである。書物の中にタバコの灰が落ちているようでは、立派な学者とは言えない（注 5)。

(6) 他人より以上にデータを集めるだけの「がめつさ」が必要である。他人と同じデータを使って同じ研究をしたのでは価値がない。

(7) 記述が第一であって、その次が結果判断である。記述が十分に行われていないと、立派な論文はできない。

(8) どういう対象を取り上げて、どのように研究を進めていくか？このプロセスが大切なのであって、結果にのみこだわってはいけない。プロセスのほうがむしろ大切なのである。

(9) 個人は常に社会の一員であるから、個人のことを調べるには、その人の環境と生活様式をも調べるべきである。

(10) 研究対象の一部分だけを切り離して見るのではなく、常に全体を頭において、部分を見なければならない。言語研究でも、一部だけを見ていると、偏った考え方しかできなく

なる。

(11) ある一つのことを調べる際には、ほかの立場からそれについて書かれているものを、できるだけ多く参照すべきである。

(12) 対象となる事実をしっかり把握していれば、方法論的に少々まずいところがあっても、価値のある結果が現われる。たとえば、ロドリゲスは、日本語をよく知っていたので、日本語をラテン語と結びつけるという間違った方法論を採用したのではあったが、良い結果を残している。

(13) 大阪外国語大学スペイン語科の Albarez 氏のように、ある一つのことを調べる際、それに関連する参考書を徹底的に調べ上げて、本文よりも注のほうが長くなるような記述方式がある。私が知っているかぎりでは、S. Ullmann : *The Principles of Semantics* は注が多い。1959 年刊行の第 2 版 305 ページは、本文が 5 行、注は 39 行である。

(14) 二つの対象を比較する場合、最初は両者の相違点ばかりが目につくが、研究が深まるにつれて、両者の共通点が見えるようになる。やはり、相違点と共通点の両方を取り扱わねば、完全とは言えない（注 6）。

(15) 辞書を作る場合、個々の見出し語には、一般・共通の意味を示さねばならない。『日葡辞書』は具体性が強すぎる。その場その場の意味を示すだけでは不十分である。どうしてそのような意味が出てきたのか？それを調べることが大切である（注 7）。

§4　土井先生のご批評

筆者作成の学問論レポート 15 項目に対して、先生は以下の 3 項目を付け加えてくださった。

何よりも謙虚であること。

ことばに対するセンスを磨くこと。

事柄(価値)についての判断力を養うこと。

でないと、単なる物識りに終り

研究者として大成することが難しい。

土井

達筆で読みにくいところもあるので、ここに改めて記しておくことにする。

「何よりも謙虚であること。
ことばに対するセンスを磨くこと。
事柄（価値）についての判断力を養うこと。
でないと、単なる物識りに終り
研究者として大成することが難しい。」

§5　おわりに

土井先生は、たとえ院生のレポートであっても手を抜かないで、誤字を正され、批評まで記しておられ、頭の下がる思いである。また、先生は、ご自分の専門分野の研究だけでなく、ウルマン『意味論の原理』のような英語で書かれた言語学書を読んでおられたことにも感心した。また、当時は、コピー機・ワープロ・パソコンなどの機械化が進んでいなかったので、データの取り込み・処理が大変だったことが偲ばれる。

昭和38年2月に行われた先生の最終講義を拝聴したとき、先生は「一つのことだけを求めていたのでは方向を見失ってしまう危険性があると思い、「キリシタン語学」だけでなく、『源氏物語』の研究も併せて、二本柱で研究を進めてきました」とおっしゃった。先生の学問に対峙する慎重な上にも慎重な態度は、研究者たる者は誰しも見習うべきであると思う。

注

（注1）実は、翌年の昭和37年度前期・後期にも「キリシタン語学」という題目で土井先生のご講義があった。筆者ももちろん受講し、ノートにびっしりメモ書きを残している。但し、この部分の記述については、本稿では割愛する。

（注2）ご講義では「中国」ではなく、「支那」が使われた。

（注3）「礼儀作法上のことが絡んでいて」とは、複雑な敬語体系の存在のことを指しているのであろう。

（注4）レポートの文面は提出時のままではない。

（注5）この項は面白いご指摘である。当時庶民はまだ煙害の意識が低く、喫煙者が多かったのである。また、「書物を大切にして、尊敬すべきである」とのご指摘と関連して、本学会の初代会長、関本至先生が「拙宅では、恩師、泉井久之助先生のご著書を書棚の一番上の段に置いている」と言っておられたことが思い起こされる。

（注6）このご指摘は、対照言語学を推進していく上で、とても重要である。

（注7）この項は、少々分かりにくいが、「場面ごとの個々の意義素（sememe）を示すだけでなく、それらの意義素に共通する原意義素（archisememe）をも示すべきである」ということであろう。